

第 30 回受精着床学会

2012.8.30-31 大阪

夫リンパ球免疫療法における妊娠予後の検討

医療法人三慧会 IVF 大阪クリニック

堀内理菜、森梨沙、井田守、藤岡聡子、杉原研吾、春木篤、福田愛作、森本義晴

目的：

昨年度、本学会において我々は IVF 着床障害症例において、夫婦リンパ球混合培養試験 (MLC: Mixed Lymphocyte Culture test) による遮断抗体活性の低下や末梢血 NK (Natural Killer) 細胞活性高値が認められた場合、夫リンパ球免疫療法 (PLI: Paternal Lymphocyte Immunization) を実施することは妊娠率向上につながる可能性を示唆した。今回我々は、症例数を増やし妊娠予後の追加検討を行ったので、その結果について報告する。

対象と方法：

2009 年 1 月から 2011 年 8 月の間に着床障害を疑い MLC, NK 検査を実施し、PLI の適応と判断された 265 例を対象とした。そのうち PLI を実施した A 群 (154 例) と患者の希望で PLI を実施しなかった B 群 (111 例) に分け、その後の IVF 臨床成績 (臨床妊娠率、着床率、流産率) の比較を行った。なお PLI の適応は MLC により測定される遮断抗体活性が 22% 未満、もしくは NK 活性 40% 以上とし、40 歳以上の症例および自己抗体を有する症例は除外した。なお、PLI 実施に当たっては事前にインフォームドコンセントを行った。

結果：

IVF 臨床成績は A 群では妊娠率 54.5% (84/154)、着床率 57.8% (89/154)、流産率 14.6% (13/89) と B 群の 18.9% (21/111)、18.9% (21/111)、42.9% (9/21)、に比べ有意に高い妊娠率、着床率であった。また流産率は A 群で有意に低値となった。両群間で患者平均年齢、胚移植個数に差は認められなかった。

考察：

MLC による遮断抗体活性の低下や末梢血 NK 細胞活性の高値が認められた場合、夫リンパ球免疫療法を実施することは妊娠率向上および流産率低下に有効であると考えられた。なお、今回の検討でも PLI による副作用の認められた症例はなかった。